

淫撮アイドル

辱獄の集い

夜士郎

表紙イラスト：成沢空

二次元ぷち文庫



試し読み版

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『淫撮アイドル 辱獄の集い』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



淫撮アイドル

辱獄の集い

夜士郎

表紙 / 成沢空

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

いとうみずほ

伊藤瑞穂

人気アイドルユニット「メリッサ」の一人。元気いっぱいな少女。負けん気も強く気丈な性格。赤髪のショートボブでつるべたロリ体型。

はらちあき

原千秋

瑞穂のパートナー。アイドルにしてはひどく恥ずかしがり屋な性格。長い黒髪のおっとりした面立ちをした巨乳美少女。

「はいみんなっ！ 今日私たち、メリッサのコンサートに来てくれてどうもありがとうっ！」

「あ、あの……、ありがとうございます、こんなにいっぱい皆さんに来ていただいて……」
可愛らしい、鈴の音にも似た声がマイクを通して響き渡る。観客席に投げかけられたその声にライブホールは割れんばかりに活気づく。

渦巻く熱気、高まる湿度、人いきれに酸素すら薄くなる。ホールを埋め尽くす観客達は汗まみれであった。

「それじゃあ、次の曲行きま〜す！」

ステージの上でぴよこんと揺れる、赤い髪のツインテール。

きいんと、ハウリングが跳ね、次いで衝撃にも似た音の奔流が巨大なスピーカーから迸る。軽快なテンションの演奏に愛らしく澄んだ少女の声が絡まりあい、会場内のボルテージをさらに押し上げていくのだ。

明滅し赤に青に黄色にめまぐるしく変化する色の洪水。そこに照らし出されるのは――
踊る二人の少女の姿であった。

「みーんなっ！ もつと声だしてっ！」

赤髪の少女が元氣よく手を振ると、一際の歓声が降り注ぐ。左右で束ねたツインテールも愛らしく跳ね回りまるで兎のようだ。

きゅつと跳ねた瞳。型よい小鼻。いまだ幼げな口元で真つ白な歯が輝いている。目一杯の笑顔を可愛らしい顔に浮かべて、ステージ中を縦横無尽に踊り回っている。

その肢体は引き締まったカモシカのようなようだ。しなやかな細い手足は汗に濡れ、飛沫を跳ねて踊る、踊る。贅肉のない鎖骨が眩しい。まるで男の子のような薄い胸には目に見える程の膨らみもなく、なだらかすぎる稜線を描いているが、しかし、それがなんとも彼女に似合って健康的な色気を醸しているのだ。

派手な衣装に身を包んでいる。膝上のミニスカートはフレアが幾つも重なっていて、さらには真つ黄色のニーソックスが足の半ばを覆っている。上半身は身体の形を描き出すようなぴっちりとした作りで、幾つものリボンが仰々しくも取り付けられていた。どこか安っぽい光沢を放つその生地に、手に持つのは奇妙な造形のバトンとくれば、まさしくアニメにありがちな魔法少女の態である。

どぎついピンク色が、むしろステージによく映えていた。

もう一人の少女は、これまた対照的である。赤髪の少女と同様に、唄い踊る花の如き乙女――。は間奏中に、

「く〜！ はう、囁んじゃった…」

などとひとりごちる。

彼女は、黒だ。

髪も黒なら、服も黒。いや、ひらひらと踊る白いエプロンだけが、異彩だ。

それはメイド服であった。

長く梳いた黒髪に反射するライトはまるで月夜の輝きを思わせ、品のよい目鼻立ちに詭えたかのようなのである。

見るからに、大人しそうな女の子だ。顔つきは僅かに丸みを帯びて、優しげである。垂れ目の瞳を見開いて、必死の顔で歌う彼女には隣で踊る少女ほどの余裕は見られない。けれど、その一生懸命な様子がどこか庇護欲をそそり、応援せずにはいられない——そんな女の子であった。

赤毛の少女のように激しく踊るわけでもない彼女へと注がれる視線は、ひどく熱い。それは、なによりも——彼女の胸元でたわわに踊る二つの大きな膨らみのせいだ。

なんとも巨大な二つの山がそびえている。まるでメロンを断ち割ってくつつけたような、幼顔に似合わぬ巨乳であった。

それが、彼女がリズムに合わせて動くたびに、上に下にと、右に左にと、忙しそうに跳ね回るので。大人しそうな彼女が清楚なメイド服を着ているだけに、その様がどこかミスマッチで——なんともいえず、エッチだ。

「うおお……でけえ……」

そんな呻き声がそこから漏れて、少女は顔を赤らめて胸元を腕で覆うが、跳ね上がる

巨乳をそんなことで隠せはしないのである。やがて、一曲を歌い終える。

「はあい！ 皆さん、とうとう最後の一曲になってしまいました。これまで聞いてくれて、ありがとうございます！」

赤毛の少女——伊藤瑞穂が、ぶんぶんとバトンを振り回すと、

「瑞穂ちゃん！」

「こっち向いてー！」

と、津波のような歓声が巻き起こる。

「あ……あの……、皆さん、今日は、会場にお越しいただいて……あ、ありがとうございます
ました……」

黒髪の少女——原千秋が、搾り出すような声を出す。終始顔を赤らめ、必死な面持ちの千秋に、観客から励ましの声がかかる。

「もうっ、千秋ちゃんはー。もっと元気よくしないと駄目だよっ」

そう言いながら千秋の肩にぱつと瑞穂が覆いかぶさる。途端に巨乳がぷるんと跳ねて、男まみれの場内がどよめく。

「あつ、も、もうっ、瑞穂ちゃん」

赤い顔がなお赤く、涙目で抗議する千秋にウインクを返すと、

「はい、それでは最後の曲になります。みんな、最後まで楽しんでってね！」

「う、歌いまひゅっ！ あう、また囁んだっ……」

口元に手を当てて俯く千秋と、観客の笑い声。それが、流れ出る前奏に重なり――。そして二人は、コンサートの締めくくりの曲を歌い始めた。

「あゝ、つかれた。つたく、オタク相手のアイドルも楽じゃないわね。ぎゃーぎゃー喧しいったら」

楽屋に向かう廊下を歩く、メリッサの二人。ごきりと首を回し、ぶつぶつと、気怠げに毒づいているのは――

「み……瑞穂ちゃん、そんな風に言っちゃ駄目だよ……」

周囲を気にしながら、千秋。

瑞穂はツインテールをばっさとかき上げ、「だあってえ。なんか臭いしき。みんな千秋のおっぱいばかり見てるじゃない？ なんなのよー、もー、もー」

「はうう……」

千秋の顔が、また赤くなる。

二人とも、汗まみれだ。少女特有のクリームのような体臭が、体温の高い二人の間にむわんとたゆたっていて、

（あゝあ、早くシャワーを浴びたいなあ）

「あ、あああ、入って、くるっ……、あああおちんちん入ってくるうううううう」
 縦皺を引き裂いて埋没する肉塊に、千秋が高らかと声を放つ。黒々とした男根が真っ白な股間にねじこまれる様は圧巻であった。

「ああひいひい、初めてなのに、なのにいっ……、あう、あああ……」
 つうと、股の間から一筋の血が垂れている。処女を奪われて、それなのに千秋はあんなにも——。

「うあう……、ひあうっ、ああ……、おかひいですう、こんなにつ……、気持ちいいなんてえっ……あうあつ、はあつ……」

その声には痛みを堪える苦悶が混じれど、確かな甘色が香っている。恥ずかしがり屋な千秋が、羞恥に顔を赤くしてそれでもあんなにも気持ちよさそうにしている、

太股に引つかかったショーツがいやらしく揺れている。汗まみれのメイド服が肌にぴったりと張り付いて、匂い立つ淫臭をくゆらせている。ぴくん、ぴくんと、突き立てられる男根にお尻が何度も跳ねて、そのたびに二つの排泄穴からどろどろの淫汁が溢れ出し瑞穂の顔面にまで飛び散ってくるのだ。

「ふいひいひい、ひいひい……、らめ、ええ、お尻の穴がつからいのに、いっぱいのにっ……、おちんちん、おちんちんまでえ……、私のお腹、いっぱいなのっ……」

爛れた瞳は理性なく、吐き出す舌は犬のようだ。さながら獣の有様で快楽を貪る千秋の

その無様な姿に。

（——ずるい）

そう、思ってしまった。

（ずるい、千秋ばかり、ずるい……。守ろうと思ったのに、それなのにつ、……。自分だけ、あんなに気持ちよさそうにしてっ……）

暗い情念であった。それはまるで脳髄ではなく、子宮から放たれた声。

「——挿れて欲しいか？」

「ひあっ!!」

ぴとりと、ヴァギナに触れる感触に腰が跳ねた。一人の男が、自分のペニスを挿んで、無防備な処女孔に押し当てているのだ。

「ち、ちが、私、そんなっ……」

「千秋ちゃんの姿を見て、こんなにひくひくして濡れているのに、何を言ってるの」

そう嘯くのは——プロデューサーであった。彼が瑞穂の股ぐらに膝立つ男にこくりとうなずくと、男は愉悦の笑みを浮かべ、ゆつくりと腰を押し込んでくる。

ぬぶう……じゅゆるっ……、じゅぽおっ！

「ああああっ……、いや、いやあああああっ……、うああ、中に、中に、はいってる、はいってきてるううううっ……」

どす黒く怒張する腐塊が、瑞穂の処女腔を貫く。ピンク色の幼唇が肉輪状に押し広げられ狭苦しい腔壁までをめりみりと拡張していく。魔法少女は未成熟な肢体を痙攣させ、己を貫く灼熱の鉄杭をただ受け入れるしかない。

「は、ひい、ああ……、熱い、熱い……、まだ、まだ入るの、まだあ……—ああつ！……、はあああ、くううあつ!!」

ぶちぶちと。処女膜が引き裂かれ。

弓なりに背筋が撓み、腰が跳ね上がる。けれど男は容赦なく呵責なく、苦悶に喘ぐアイドルの最奥まで一気に突き入れたのだ。

ずぶうう！　ぶじゆるうつ！

「あ……、お、あ……あ、……」

焼けつくような、衝撃。

「あう、あうううああ、そんな、ところまで、刺さってるうう……死んじやう、私死んじやうようつ……」

お臍の真下で暴れる熱塊、まるで内臓の全てがペニスと入れ替わってしまったかのよう
に腹腔がうねくる。破瓜の痛みが陵辱感の際だたせ、脈打つ肉棒の感覚が現実を認識させ、
理性が、精神が打ちのめされる。

「あひあ、ひあつ、らめ、動かさないで、あ、ああ、いい、ふあああ〜」

瑞穂の身体の上で喘ぐ千秋はもはや自ら腰を振り、被虐の快楽を愉しんでいる。愛らしい笑みを浮かべたその表情は、時折カメラに向けて、まるでレンズの前ではそうするべきだと言わんばかりであった。

「お、俺も俺もっ」

「千秋たん、しゃ、しゃぶつてくれえっ」

不意に二人は引き離され、その場に並んで四つん這いの姿勢を強制される。穿つ男根はそのままに、アイドルの唇は腐った男根に貫かれてしまう。

「ぬじゅ、る、じゅぶっ……、ご、ごほごほ、そ、そんな乱暴にッ……、う、うぶうっ、じゅ、じゅぶっ！」

「ぺろ、ぺろ、おちんちん、おいしいですっ、ん、じゅぼ、ぶじゅるうっ」

——もう、何がなんだかわからなかった。捲られた魔法少女のスカートの中は愛液まみれのぐちよぐちよで、マイクの埋もれる肛門は腸液を垂れ流し、陰唇は子宮口まで挟まれて乱雑に掻き回される。喉奥まで貫く腐肉が食道を挟り、少女の穴という穴は男の欲望に強制拡張されてしまっていた。

苦痛、快楽、苦悶、悦楽、なにもかもない交ぜになった黒い情欲が理性を吹き飛ばす。二人して犬のような屈辱的な格好で、その全てを撮影されていて——

それが気持ちよくて仕方がないのだ——。「あぶ、うぶうっ！ マイクを、マイクを触

るなあっ！ お腹が、お腹が、ひい、ああひあああ、くああっ……」

「おっぱい、おっぱいっ、らめ、元に戻らなくなるからっ、そんなに……、ぐちゃぐちゃにしないでっ、ん、くふううんっ」

「ごん、ごん、じゅぽ、じゅぷっ！　ぐっちやぐっちや、にぐじゆる、ずぼっ！　ごりごりごり、ぐっぽぐっぽ、びちゃあっ！」

狭苦しい楽屋の中に響く淫音のカーニバル、悦辱の嬌声を放つのは肉詰めアイドルの汗まみれの美貌。二人の幼い肢体が官能に喘ぎ、コスチュームはありとあらゆる体液に汚染され、淫毒はじゅくじゅくと皮膚の中心まで染みこんでいく。

「あぐ、はあうあつ、駄目え、イク、いくう、犯されてるのに、私い、イツちゃうう、やめて動かないで、子宮が破れちゃううっ」

可愛らしい顔をくしゃくしゃにして涙を流し、瑞穂はイヤイヤと首を振る。

「くはひい、あひいん、瑞穂、わだしも、わたしも、いっちやうの、アソコとおっぱいいじめられてえっ……、いっちやうのおっ、あ、ふひあああああ……」

千秋の顔にはもはや理性の欠片もなく、それはまさしくアクメ顔であった。忙しなく動く首は自らペニスを味わいに伸びている。

「こ、こんなっ……、俺たちのアイドルが、こんな姿に……、ぐうう、お、俺、もうっ……、ぐうううおおっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>